

歴史家の世代とドイツ連邦共和国の歴史像

——一九五〇年代から現在まで——

白川 耕一

はじめに

二〇一五年四月一三日、ドイツ人作家ギュンター・グラスが亡くなった。グラスは、作品を通じてドイツ社会の保守的、反民主主義的体質を批判し、社会にコミットし続けた作家である。かつてのドイツ統一国家がヨーロッパの火種となったがゆえに、分裂こそ望ましいと考える彼は、統一に批判的だった。ドイツの分裂は第二次世界大戦後の米ソ対立という国際政治上の帰結であるが、グラスはナチズムと戦争に関連づけて分裂を説明し、そこから彼自身にとっての意味を引き出したのである。

ドイツ連邦共和国（旧西ドイツ、現在のドイツ）の来し方と行く末を論じたのは、グラス一人ではなかった。人工的に作られたドイツ連邦共和国にあつて、「ドイツがなぜこのような状態にあるのか」、そして「どうあるべきか」について常に説明が試みられてきた。「なぜこのような状態にあるのか」といった問いに対する回答は、歴史像と密接にかかわっていた。ハイデルベルク大学教授エドガー・ヴォルフは、『連邦共和国における歴史政策——連邦共和国の記憶へ

の道一九四九―一九九〇年』において、歴史政策という視角から、ドイツ連邦共和国が自らの歴史意識をいかに形作って来たのか、その過程を跡付ける。建国当初は再統一願望が強かったが、六〇年代になると新しい世代を中心に二つのドイツの存在を受け入れる動きが強まった。再統一に代わる新しいアイデンティティとして憲法愛国主義が受容され始め、自らの歴史として一九世紀の自由主義運動が発見された。七〇年代には自由や民主主義といった西欧の価値に基づいた西ドイツの記憶が形成されたと、ヴォルフムは述べる。西欧と共通の価値観に基づき、一九四五年以前の歴史に対して否定的評価がくだされた。戦後のドイツを分析する空間的枠組みは、第二次世界大戦前のドイツ領ではなく、東ドイツを除外した西ドイツとなった。八〇年代末までに「歴史意識の連邦共和国化」(Bundesrepublikanisierung des Geschichtsbewußtseins)がおこなわれ、西ドイツに適合的な歴史像が創られたと、ヴォルフムと結論づける。¹¹⁾

連邦共和国に適合的になった歴史意識は日本の歴史学界にも影響を与えた。日本人歴史研究者が西ドイツに留学し、フィッシャー論争、「特有の道」論争、社会史論争、歴史家論争が日本で詳細に紹介された。論争紹介の際、改革派や左派の見解に日本のドイツ史学界は好意的であり、連邦共和国に適合的な歴史意識が日本人研究者の間にも浸透したのではなからうか。連邦共和国を歴史化する作業において、連邦共和国の語られ方を歴史分析の対象とし、その時代規定性を検討することは、私たち日本人が抱くドイツ史像の再検討につながる。本稿は、歴史家の世代に注目しながら連邦共和国の自画像を跡付ける。¹²⁾

ところで、西ドイツ史に関する研究はながらく不活発な領域だった。その理由は、連邦共和国の歴史が現在も進行中の「閉じられた歴史」ではないうえに、歴史研究対象としては時間的隔たりが小さく、文書作成後三〇年間という閲覧禁止期間ゆえに未刊行史料へのアクセスが困難であったことなどの理由も考えられる。さらに戦争と革命が連続したドイツ近現代史において、一九四五年以降の時期が例外的に平和だったことも、西ドイツ史に関心が向かなかった原因であろう。しかし、近年、連邦共和国に関する歴史研究は、ヴァイマル時代やナチ時代に関する研究と肩を並べるほど、活発化している。¹³⁾

一 連邦共和国史の形成

(二) 過去と現在なき国家―ドイツ連邦共和国―

建国当初、西ドイツは、国民にまとまった歴史像を提示できなかった。⁽⁴⁾ ポピュラーな概説書として、『ゲープハルト・ドイツ史ハンドブック』を見てみよう。第二次世界大戦後初めて一九五九年に刊行された『ゲープハルト』の第四巻は第一次世界大戦から一九四五年の敗戦までを叙述している。一九七六年に大幅に増補されたうえで、再版された『ゲープハルト』では、建国から三〇年近くが経過したのにもかかわらず、東西両ドイツの建国までが描かれ、その後の歴史は加筆されていないのである。

その背景には、対象との時間的な隔たりの大きさというよりもむしろ、一九五九年版と七九年版において第一次世界大戦以降のドイツ史を執筆したカール・デイトリヒ・エルトマン（一九一〇年に生まれ、キール大学教授（五一―七八年）、九〇年死去）の姿勢にあるように思われる。七六年版の『ゲープハルト』第四巻の末尾で「ドイツ史は可能か」と問う彼は、西ドイツの歴史も東ドイツの歴史もドイツ史と見なさなかった。さらに、オーストリアがドイツから離れたことも、一九五〇年代以降の歴史をドイツ史として書けない理由の一つだった。

ドイツ史の対象を部分的国家の一部に限定せざるを得ないのであれば、ドイツ史という考えはまったくつまらないものになってしまう。連邦共和国の歴史はドイツの歴史ではない。同じことは、国民的伝統を独占しようとする、ドイツ民主共和国の試みにもあてはまる。再建され、独立したオーストリアをドイツの歴史的関連から切り離そうとするのも、無益な試みである。まだ終わりに至っていないドイツの歴史を論じようとする時、かつてドイツと呼ばれていた、実態としても、運命的にもつながっていた「が現在では切り離され、西ドイツ、東ドイツ、オーストリアといった」部分領域「になってしまったところ」で起こったことを、それ自体は不可欠でも、数え上げ、比較し、

記録することにとどまらない。⁽⁵⁾

エルトマン、コンツエ、シーダーなど、西ドイツ史学界再建世代が、第二次世界大戦以前にナチ体制を支持し、協力したことは既に知られている。クリストフ・ノンによれば、一九世紀生まれのフリードリヒ・マイネッケらの世代とは異なり、エルトマンら一九〇〇年代に生まれた歴史家は思考を柔軟に変え、西ドイツに適応していった。⁽⁶⁾ それでも、エルトマンは、西ドイツをドイツと連続しない別の存在と見なし、一つのドイツ民族にこだわり続けた。⁽⁷⁾

西ドイツをドイツの連続と見なさないエルトマンの見解は例外的ではなかった。一九六〇年五月、カトリック・アカデミー大会のシンポジウム「ドイツの歴史像は存在するのかー存在しなかったのか。現在は存在するのか」が開催された。各報告の結論は共通しており、現在の二つドイツ（西ドイツと東ドイツ）は、神聖ローマ帝国のような普遍的帝国やドイツ帝国（一八七一一一九一八年）といったドイツ人が知る国家の観念と大きく隔たっており、そのため、最新の内容をもつドイツ史像は存在しないというものだった。報告者のミヒャエル・フロイント（キール大学教授）は「ドイツは存在しないし、ドイツ史もない。ドイツ史をどのように書くのかといったコンセプトもない」と率直に述べた。⁽⁸⁾

西ドイツ人の歴史意識について、ヴォルフガング・J・モムゼンは以下のように書いている。

抽象的な歴史への逃避以上に、現在においては、歴史がないことへの退却が確認される。つまり、「歴史の前に降参」（ハインベル）と言う態度である。これもまた、世界のいたるところで見られる現象であるが、ドイツ以上に広がっている場所はない。一八七一年以降の私たちの政治的歴史の中の、いくつもの断絶によって、歴史的なものが続いているという感覚は麻痺してしまった。すなわち、過去を自分たちのものとして理解することが難しいのである。政治制度の急激な転換によって、「……」私たちが予断なく歴史に向き合うことが難しくなった。⁽⁹⁾

工業社会における歴史意識の欠如は当時しばしば指摘されていたが、モムゼンによれば、あえて過去を知ろうとしない態度が他の地域以上にドイツでは強かった。人々は感覚的に自らの過去に目を閉ざそうとしていたのである。

エルトマンの見解は一九五〇年代の西ドイツの政治的立場にも関係していた。統一ドイツに代わる暫定国家として建

国された西ドイツは再統一を志向し、さらにドイツ人を代表するのは西ドイツのみという原則があった。⁽¹¹⁾ 再統一への志向を表すのは、「ドイツ統一の日」の制定である。一九五三年六月一七日にノルマ引き上げに反対して東ドイツ各地でストライキやデモ行進が発生した。この抗議運動は、西ドイツでは東ドイツ市民が統一への意志を表明したものとして読み替えられ、東ドイツ市民の勇気を称賛し、統一を祈願する「ドイツ統一の日」が設けられたのである。「統一の日」には、西ドイツ各地で統一祈念式典が開かれ、そのための碑が建設された。⁽¹²⁾

歴史家は、連合軍によってもたらされたドイツ分裂の不当性とドイツ国民国家の復権、反全体主義を主張した。⁽¹³⁾ 東ドイツが主張する、「ブルジョワ国家」(西独)と「労働者と農民の国家」(東独)の併存という「二つのドイツ国家」論を歴史家テオドーア・シーダーは強く批判した。「ドイツの分裂はドイツ史において真実ではない」と見なすシーダーにとつて、暴動が発生した一九五三年六月一七日は「百年に一度の日づけ」であり、「ドイツ民族として歴史的復権の日」であった。⁽¹⁴⁾ 西ドイツは、接続すべき過去も、暫定国家として現在も持たない国家だった。

(二) 連邦共和国の唯一の歴史家世代

『グープハルト』の第二版が出版された時、すでに新しい動きが始まっていた。西ドイツ建国二五周年を記念して、政治学者リヒャルト・レーヴェンタールとハンス・ペーター・シュヴァルツが編集した『第二の共和国 連邦共和国二五年』(一九七四年)が出版された。⁽¹⁵⁾ レーヴェンタールによれば、西ドイツ建国は、ドイツ史上初めて、ドイツの支配層が自由主義的国家形態、アメリカ的市場経済、西欧的市民生活形態を受容したことを意味した。⁽¹⁶⁾ 七〇年代になると西ドイツは建国当初の古い体質から脱し、政権交代、景気後退、極右の台頭といった危機を乗り越える能力を持つに到ったことを、レーヴェンタールは強調した。⁽¹⁷⁾ 国民の間で「連邦共和国は正統性を獲得している」のだった。⁽¹⁸⁾

一九六〇年代末から七〇年代初めにかけての時期は、西ドイツにとつて転機となった。外交的にも、西ドイツはオーデル・ナイセ線をドイツ・ポーランド間の国境として承認し、東ドイツの存在を事実上認めた。西ドイツ人の意識も少

しずつ変わった。一九四〇年代後半、「ドイツは再統一すべき」とドイツ人の殆どが考えていたが、一九七一年でも再統一願望を否定する者の割合は一四%に過ぎない。ドイツ統一を重要課題として挙げた者は西ドイツ人の四割に達したが、再統一は最優先課題ではなかった。西ドイツ人にとって、統一によって自国の経済的繁栄が損なわれないことが重要であり、さらに、統一のために東ドイツの内政改革も不可欠だった。西ドイツ国民は東西ドイツの再統一を志向するアイデンティティから、一九六〇年代に緩やか離脱し始めており、東ドイツは他の東欧社会主義諸国と同列に考えられるようになった。将来の再統一を志向するにしても、それは第二次世界大戦前のドイツ領ではなく、西ドイツと東ドイツの領域に限定された。さらに一九七〇年代には統一は目指されずに、新たな国家国民が西ドイツに形成されつつあることが指摘されていた。⁽²⁰⁾⁽¹⁹⁾

しかし、依然として、西ドイツ国民の歴史意識は欠如していた。レーヴェンタールは西ドイツでは市民に共有される歴史のアイデンティティの基盤がないと述べた。ナチスの台頭と没落によって、西ドイツは歴史の連続性から切り離されており、特に若い世代のアイデンティティの欠如が顕著だった。⁽²¹⁾

一九八〇年代半ば、コール保守政権が、歴史を通じて西ドイツ人にアイデンティティを付与しようとする政策をとったことはよく知られている。だが、そうした歴史政策は七〇年代の社会民主党／自由民主党連立政権期から始まっていた。一九七一年はドイツ帝国建国百周年の年に当たる。一月一七日の記念式典で演説した大統領ゲスタフ・ハイネマンは、「一八七一年を祝福してよいのか」と問いかけた。ハイネマンは、東西両ドイツ統一の可能性を除外し、平和共存という全ヨーロッパ的秩序を求めた。⁽²²⁾ハイネマンにとって、西ドイツの国家形態としての共和制、シンボル、憲法にあたる基本法の意味における民主主義的秩序は、これまでの歴史の中で例がないほど、受け入れられているのであり、西ドイツの内的まとまりは完成しているのだった。西ドイツはドイツ帝国と無関係であるだけでなく、西ドイツがドイツ帝国よりも優れていることを、ハイネマンは強調した。なぜなら、西ドイツでは「基本法によって全ての市民に自由の権利が保障されている」からであり、これを欠いていたドイツ帝国から「重大な負担」が生まれたからであった。⁽²³⁾

ハイネマンによれば、ブランド政権下の東方諸条約によって、東欧諸国との関係を確定し、それによって西ドイツは世界から承認された。さらに、これまで政治体制が危機に陥ることなく、首相の交代や与野党間の政権交代がおこなわれた。これらによって、ハイネマンは「伝統」が創られたと述べ、「ドイツ国民国家に代わる新たな国を作ることは」長らく意に反していたとはいえ、私たちは、完全な意味での国家になった」と発言した。⁽²⁴⁾

新しい国家には自らの歴史が必要だった。一九世紀の自由主義運動に西ドイツの根が見い出された。ドイツにおける一八四八／四九年革命において革命側が敗北したが、「誰が本当の勝者だったのか」と問いかけるハイネマンにとって、真の勝者は革命側だった。彼は、「現在の民主主義を準備した運動をあえて語られない状況から救い出し、私たちの現在に関係づけることが重要」であり、「私たちの現在の体制には独自の根があることを意識することが肝要です。私たちの体制は戦勝国によって作られただけではないのです」と主張した。ハイネマンは、ドイツ・ジャコバン派、市民の自由主義者、ラディカルな民主主義者、ヴァルトブルクの学生などを列挙した後、たとえ反動勢力が勝利し、自由を目指す運動が消滅したとしても、運動は労働運動といった別の形態で生き続けたと述べた。ハイネマンは、現在の西ドイツを一九世紀の自由主義運動の連続の中に位置づけようとしたのである。⁽²⁵⁾

大統領ヴァルター・シエールは、一九七六年の歴史家大会など様々な機会で、歴史に関する講演を行なった。シエールは「これまでの国民のなかで、連邦共和国だけ特徴がない」と訴え、啓蒙された歴史意識を国民の間に目覚めさせることを要求した。彼によれば、誤った歴史意識を持てば、再びカタストロフィーがやってくるのであり、アメリカや西欧の伝統に連なるような歴史意識を創出することを歴史家に求めたのである。⁽²⁶⁾

こうした動きを背景に、新しい歴史家の世代が浮上してきた。歴史家パウル・ノルテ（ベルリン自由大学教授）は、旧西ドイツ社会に対して大きな影響力を及ぼし続けた歴史家の世代に注目する。その歴史家世代には、ハンス・ウルリヒ・ヴェーラー（一九三二年生まれ）、ハンスとヴォルフガング・J・モムゼン（一九三〇年生まれ）、ゲルハルト・A・リッター（一九二九年生まれ）、クリスチャン・マイヤー（一九二九年生まれ）、ヘルムート・バーディング（一九三〇年生まれ）、ユ

ルゲン・コツカ（一九四一年生まれ）、ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー（一九三八年生まれ）が含まれる。

一九三〇年前後に生まれた彼らは、ヴァイマル時代の記憶をほとんど持たず、幼年時代をナチ統治下で過ごした。彼らにとって、ナチ時代と第二次世界大戦が決定的な経験となった。戦争末期に彼らは出征したか、または高射砲補助員となった。第二次世界大戦後、大学に入学した彼らは、テオドーア・シーダー（一九〇八年生まれ）やヴェルナー・コンツェ（一九一〇年生まれ）に学んだ。一九六〇年代から七〇年代に、三〇代後半から四〇代の年齢で彼らは大学教授に就任したが、世代交代と相まって、講座数の半分ポストを新しい世代の歴史家が占めた。「連邦共和国の歴史家世代」の歴史家は、歴史に対する西ドイツ社会の関心が高まったことを背景に、メディアを通じて歴史学界だけでなく、世論全体にも大きな影響力を及ぼし続けた。⁽²⁷⁾そして九〇年代後半に、彼らは大学教員のキャリアを終えた。ノルテによれば、この世代の歴史家は、連邦共和国の時代が人生経験の一部になった、唯一のグループである。⁽²⁸⁾

これらの歴史家の政治的立場は、リベラル保守からリベラル左派にまで様々である。しかし、共通点として、西ドイツ成立後の数年間に政治的に強い影響を受け、西ドイツの民主主義を防衛するという強い意志を抱いていた。敗戦によるドイツの伝統の権威失墜を経験した彼らは、変化を求め、西欧やアメリカに新しい価値基準を見出した。⁽²⁹⁾「連邦共和国の歴史家世代」のうち、リベラル左派グループを見ると、彼らは、ヒトラーの戦争の帰結としてドイツの分裂を常態として認め、その点で、「連邦共和国の歴史家世代」の歴史家はエルトマンらの世代の態度とは異なっていた。彼らは東ドイツへの関心を持たず、彼らにとって西ドイツこそが「ドイツ」であった。ポスト・ナショナルな民主主義を支持していた彼らの意識は、連邦共和国の世論を反映していた。⁽³⁰⁾

西ドイツ建国時に見られた「失われた国民国家への信仰」は六〇年代を通じて低下し、七〇年代には、西ドイツはすでに確固たる存在と見なされた。新しく台頭した歴史家の下で、西側と共通のアイデンティティや、西ドイツにとってふさわしい過去が模索された。

(三) ドイツ現代史の「大きな物語」

「連邦共和国の歴史家世代」の歴史家はナチスの政權掌握に至る道の解明を中心課題とし、一九世紀史や二〇世紀前半を研究対象としていたため、西ドイツの歴史を書くことはなかった。一九九九年と二〇〇〇年にヴィンクラーは、『西への長い道』（邦題『自由と統一への長い道』）を出版した。^[32]二巻合計一三〇〇頁に及ぶ大著にもかかわらず、発売以来、二〇一〇年までに第七版を重ねている本書は、現在のドイツ人の歴史意識を知る手がかりとなるだろう。

ヴィンクラーの歴史叙述の終着点は、ドイツ統一の「一九九〇年」に置かれ（Ⅰ、ii頁）、「西」とは、統一後の連邦共和国である。すなわち、自由で社会的な民主主義国家で、ヨーロッパに統合され、さらに政治・軍事的にもNATOの一員として行動する国である。第一巻は一九世紀初めから一九三三年までを扱い、第二巻は一九三三年から一九九〇年までを叙述している。「特有の道」から脱し、「西」に接近する過程を描いた第二巻を検討しよう。

ヴィンクラーは一九四五年を決定的な転換点と見なす。「空襲、東部居住地からの追放、そして『崩壊』『ナチス・ドイツの崩壊』により、ドイツ社会は『第三帝国』の最初の一〇年以上に大きく変化した」と、ヴィンクラーは述べ（Ⅱ、一九九頁）、ナチ体制下における近代化を否定し、その崩壊に転換点を見出す。反自由主義と反ユダヤ主義は後退し、戦前の「特有の道」からの離脱が始まった。

ヴィンクラーが描く一九五〇年代像は、二面性を持つ。「高い経済成長率の背後で、西ドイツでは五〇年代、ヴァイマル期や『第三帝国』期の社会構造的変化を凌駕する社会変容が生じた。……プロレタリア的階級意識なるものは、すでに五〇年代半ばにはほとんど感じられなくなっていたし、ヴァイマル期のような前工業的エリートはもはや存在しなかった。宗教的対立もかつての激しさを失った」（Ⅱ、一五七頁）と、ヴィンクラーは述べる。西欧へのドイツ文化の開放もおこなわれた（Ⅱ、一七五頁）。

戦前的なメンタリティーや社会環境からの離脱が発生する一方、保守的心性も持続されており、ドイツ帝国やナチ時代前半の時期にシンパシーを抱く者も少なくなかった（Ⅱ、一六五頁）。ナチズムの過去に対する本格的なとりくみも行わ

れず(Ⅱ、一七二頁)、西側統合というアデナウアーの外交政策すらもまだ合意されていなかった(Ⅱ、一七〇頁)。

しかし、ドイツ社会では変化が進行しつつあった。一九六二年一月、連邦軍の機密漏えいを口実に、政府は激しい政府批判をおこなう雑誌『シュピーゲル』の編集部を逮捕した(『シュピーゲル』事件)。この言論弾圧に対し、多方面からアデナウアー政権は批判にさらされた。ヴィンクラーは以下のように述べる。

「一九六一年の時点で」政権交代の経験はまだなく、それとともに「統制が」より少なく、市民への要求がもっと強い別の民主主義の形態の習得もなかった。しかし、エリートたちもまた、ドイツ史上初めて国家権力が国民に源を発するという秩序の基盤に立っていた。西ドイツは機能良好な西欧民主主義になった(Ⅱ、二二六頁)。

一九六〇年代になると、国民によって民主主義が受容され、政党間のイデオロギー対立が消滅し、ヴィルヘルム時代の政治文化から離脱していった(Ⅱ、二二五―二六頁)。こうして、西ドイツは一九四五年までの特有の道から離脱した。

これに対し、東ドイツに対するヴィンクラーの評価は厳しい。⁽³³⁾ヴィンクラーによれば、東ドイツの建国はソ連型共産主義的独裁の移植に過ぎず、結局のところ司法は支配の道具となった(Ⅱ、一五〇、二六六頁)。九〇年代以降に社会史研究がすすみ、東ドイツ体制を単なる独裁とすることに疑義が呈せられている。⁽³⁴⁾しかし、そうした見方を、「行き過ぎた実証主義」と、ヴィンクラーは退ける(Ⅱ、i頁)。

非民主主義体制という点で東ドイツでは「特有の道」が続いていた。さらに、六〇年代以降、西ドイツが独自の国民国家形成に向かうが、それに対応して東ドイツでも、「労働者と農民の社会主義国家」といった、民族に依拠しない「社会主義的特質を持つ国民」(Ⅱ、三二二頁)が構想された。しかし、東ドイツは独自の国民形成に失敗したうえ、自由化は行われず(Ⅱ、三二五頁)、国際主義という点でも東ドイツは「特有の道」を歩み続けた。

一九四五年以前の「特有の道」から離脱したものの、西ドイツは、「ポストナショナル」という、別の特殊な道を歩み続けた。再統一願望が強かった西ドイツにおいて、六〇年代には、リベラル保守が、東ドイツと切り離された、西ドイツの愛国主義を求めた(Ⅱ、四一二頁)。その後、東方条約締結(一九七二年)以降、中道や左派の間でも、東西両ドイツが統

一を果たしたドイツ国民国家は過去のものになったと考えられた(Ⅱ、四二一頁)。八〇年代にドルフ・シュテルンベルガーによって唱えられた憲法愛国主義が受け入れられ、さらに、西ドイツ人のポストナショナルなアイデンティティとして、ホロコーストに対する反省が定着した(Ⅱ、四二五頁)。

ヴィンクラーにとって、国民国家そのものは誤りではなく(Ⅰ、ii頁)、「ポストナショナル」な西ドイツはやはり特殊な状態だった。ドイツ統一によって、「旧西ドイツのポストナショナルな特有の道と、東ドイツの国際主義的な特有の道」は終了し(Ⅱ、六二五頁)、これまでドイツ史を規定した「特有の道」からドイツは最終的に解放された。

ヴィンクラーによれば、統一ドイツは「諸国民国家のもとにおけるポストナショナルな民主国家」ではなかった。そうではなく、主権を有しながらも、ヨーロッパ連合などの超国家的共同体に国家主権を移譲した「民主的なポスト古典的な国民国家」であり、それは「ヨーロッパ的正常化の一部」である(Ⅱ、六二六頁)。

ヴィンクラーは、西ドイツを中世以来のドイツ史の中に位置づける。彼によれば、本来西欧の一部であったドイツは、エリートがアメリカ独立やフランス革命の政治的成果を拒否したことによって、「特有の道」をたどり、第一次世界大戦からナチス支配に至る時期が反西欧の頂点となった。ナチスが敗北した後、西ドイツは再び西欧の一部になり、そこから西ドイツ国家が生まれた。西ドイツこそがドイツの民主主義的伝統を継承する国家である。統一によって東西両ドイツは特殊な状態を最終的に抜け出した。「西」に行き着いたという歴史に満たされたドイツ連邦共和国の姿を、ヴィンクラーは提示したのである。⁽³⁵⁾

二 歴史像の再構築にむけて

(一) 西ドイツ史の問い直し

エルトマンやヴィンクラーよりも若い世代は、戦後ドイツ史をどのように見ているのだろうか。一九六〇年生まれの

ヴォルフムルムや六五年生まれのエックハート・コンツェはヴィンクラー世代の弟子にあたる。ヴォルフムルムらにとって、生まれた時にすでに西ドイツは存在し、物心つく頃には、東ドイツも承認され、一民族二国家は、彼が生きる世界の前提条件となっていた。さらに、彼らが大学に入学するころには、西ドイツ社会に民主主義も定着していた。

二〇〇九年はドイツ連邦共和国の建国六〇周年にあたり、それに合わせて連邦共和国通史の出版が相次いだ⁽³⁶⁾が、エックハート・コンツェ『安全の希求―連邦共和国の歴史、始まりから現在まで』(二〇〇九年)を見てみよう。

西への統合も成功史として表現しうる。「特有の道からの離脱」、「西への長い道」も、国民史的には、一九九〇年に、一九世紀以来、ドイツ史においてお互い矛盾し合っていた自由と統一がようやく和解したというハッピーエンドであらわされる。他の歴史家にとつては、「連邦共和国の成功史」は、ドイツ全体に渡る展開や東西ドイツの統一と関係がない。むしろ、「旧」連邦共和国がドイツの悲惨から西側の世界に至ったのであり、西との結合は東ドイツの終焉やドイツ国民の統合によっても後退させられなかった。このように、西への道を進むこと、「西欧化」、「自由化」、「文明化」の道をドイツが進んできたことは、近年研究され、分析されてきた。特に、ドイツの特有の道という大きな物語との格闘を通じて、連邦共和国にかかわる大きな物語が生み出されてきた。その物語は、ドイツ現代史だけでなく、ドイツの世論にも大きな影響力を持つ(二一頁、傍点は引用者による)。

ヴィンクラーの目的は一九九〇年に「特有の道」からドイツが解放されるに到る、その過程を描くことであり、それはヴォルフムルムが「到達史」と呼ぶ視点である。そのため、ヴィンクラーは統一後についてはほとんど述べていない⁽³⁷⁾。ヴィンクラーが描く、西への接近という「大きな物語」に対して、すでに統一から二〇年を経た時点に立つてコンツェは自らの位置を考える。彼は、ナチズムからいかに離れたのかを強調する一九四五年を起点とする枠組みと、なぜ再統一が達成されたのかを中心的な課題とする一九八九年を終点とする叙述をとらない。達成を強調するよりも、むしろ達成や成功からいかなる問題が発生したのかを、コンツェは問う。彼によれば、成功から問題が生まれるのであり、その連鎖の歴史として、彼は西ドイツの歴史を書くのである(一二頁)。

コンツェは、本文の九三〇頁のうち、一九〇頁を統一後の展開に充てており、現在のドイツが直面する課題を述べる。統一以降の動向を見ると、統一時の熱気はすぐに失われ、財政問題や旧東ドイツ人と旧西ドイツ人との対立（七七七頁）にドイツは直面した。一九九〇年より前の選挙においての投票数の四割を浮動票が占めていたのに対し、九〇年代に入ると、その割合は五割以上となった（八〇五頁）。それまでの四党（キリスト教民主同盟／社会同盟、社会民主党、自由民主党、緑の党）体制から、五党（先に挙げた四党に加えて、左翼党）体制に移行した（八〇五頁）。キリスト教民主同盟や社会民主党といった国民政党が、下層の支持を受けられなくなっており（九三三頁）、ドイツの政治文化の変容が現れたのである。社会経済的にも、進行するグローバル化（八二二―八二二頁）、貧困、格差（八二七頁）、情報化社会、テロリズム（八三一頁）、深刻化する環境問題、景気にかかわりなく増加するブレイカリアート（九三三頁）などの問題を、コンツェは指摘している。

社会政策史研究者ルッツ・ライゼリングは、一九四九年以降から二〇〇〇年代までのドイツ社会政策を概観した論文のなかで、九〇年代半ばから二一世紀初頭に社会国家（福祉国家）の転換点を見い出している。社会的市場経済や社会国家などといった、これまでの方法では、二一世紀の諸問題を解決できないと、ライゼリングは述べる。⁽⁸⁾コンツェも以下のように書いている。

もちろん、「西ドイツ民主主義の―引用者による補足―成功には代償が必要だった。政治制度および社会的秩序の安定と受容は、包括的な社会国家が存在することによって促進され、社会国家の整備の度合いと民主主義の成立条件は重なり合っている。政治的・社会的安定の基盤として、経済的豊かさや社会的調整とを結びつけてきた「モデル・ドイツ」は常に存在するものではなく、特定の歴史的につくりあげられた配置に結び付いている。この配置が比較の長く続いたことは、西ドイツのドイツ人にとって幸運だった。一九七〇年代に成功が明確になり、しばしばモデル・ドイツについて語られるようになった時、その配置はすでに存在しなかった（八八八頁）。

〔…〕

連邦共和国は、一九四九年以降の自らの成功の歴史を顧みるだけではなく、どうしようもない問題に直面しているのである。問題は、連邦共和国初期の成功を可能にした政治的、社会的、経済的配置が一九七〇年代以降変容し、現在ではもはや存在していないことにある（九三三～九三四頁）。

変化は政治の領域にも及ぶ。一九九九年にはユーゴ紛争において連邦共和国史上初めて連邦軍が軍事行動に参加した。九〇年代後半以降の動向は、これまでの連邦共和国を特徴づけていた制度や路線からの離脱を表している。

（二）転換期としての一九七〇年代

歴史家エリック・ホブズボームは、第二次世界戦後の歴史の転換点を一九七〇年代に置くが、七〇年代を画期とする見方は西ドイツ史にもあてはまる。⁽⁴⁰⁾最近のドイツ現代史研究において七〇年代から八〇年代に関心が向けられている。もちろん、行政文書の公開が進んだことによって、七〇年代が歴史研究の対象となる時代に入ってきたこともその理由であろう。むしろ、現在との関係において、七〇年代は注目を浴びている。

コンラート・H・ヤーラオシュ編『確信の終わり―歴史としての七〇年代』（二〇〇八年）を見てみよう。七〇年代を「現在の諸問題の前史」にあたる時代ととらえるヤーラウシュは、現在の始まりを八〇年代末の共產主義政権の崩壊ではなく、七〇年代に資本主義圏と社会主義圏の両方で発生した構造転換に見い出す。七〇年代は、脱工業とサーヴィス業の発展によって特徴づけられる工業化の新たな局面の始まりだった。一九七三年に西ドイツにおける第三次産業分野の被雇用者数が第二次産業分野のそれを上回り、石炭採掘や製鉄などの重工業分野と軽工業は急速に衰退し、アジア諸国との経済競争から合理化が強制された。不況によって、「進歩は留まることはない」という確信⁽⁴¹⁾は人々の意識から消え去った⁽⁴²⁾。

さらに、不況に対して国家はなすすべがなく、国家の統治能力にする疑念の声が上った。社会民主党やキリスト教民主同盟が頼るケインズ主義では不況から脱却できずに、政策は迷走状態に至った。計画も有効性を失った。⁽⁴²⁾

西ドイツ思想史を分析するガブリエ・メッツラーによれば、七〇年代には「民主主義の危機」「民主主義の過剰」「国家に対する過大な要求」「統治不可能」など、様々な危機的現象が語られた。西欧の自己理解は動揺し、個人化や価値観の多様化によって、これまでの規範が問い直されるに至った。⁽⁴³⁾

七〇年代研究の中心人物である、アンゼラム・デーリング・マントイフェルとルッツ・ラファエルは、現在のネオリベラル時代の始まりとして、七〇年代の意味を強調する。彼らによれば、一九七三年に「構造断絶」が発生し、その作用は経済だけでなく、思想や人々の行動様式の変化にまで及んだ。第二次世界大戦後の国際経済体制の根幹であるドル体制が大きく動揺し、西ドイツの伝統的産業（石炭採掘、鉄鋼業など）が不況に陥る一方で、第三次産業分野が拡大し、思想的にも新自由主義が浸透していく。ラファエルとデーリング・マントイフェルによれば、一九七〇年代に発生した「構造断絶」に始まる危機の時代が二〇年以上も続き、動揺しつつも古い構造が維持され、それに代わる新たな構造は形成されなかった。⁽⁴⁴⁾戦後史はナチズムとの関係において意味づけられる傾向があったが、七〇年代はナチズムの後史ではなく、むしろ「高度経済成長後の変容史」として理解すべきであると、ヴァインフリート・ズュースは提案する。⁽⁴⁵⁾

かつての研究者が満足感を漂わせながら描いた西ドイツ史は、批判的な視線のもとで検証されている。アンドレアス・レーダー／トーマス・ハートフェルダー（編）『モデル・ドイツー成功の歴史か、幻想か？』（二〇〇七年）は、従来安定的とされた西ドイツの社会経済モデルを歴史学的に検討している。⁽⁴⁶⁾福祉国家も批判的検討の対象である。雑誌『社会史叢書』第四七巻（二〇〇七年）は、「危機の社会国家―国際比較におけるドイツ」を特集した。⁽⁴⁷⁾社会国家は福祉国家とほぼ同義と考えてよい。一三編の論文から構成される本特集の論調に、企画段階における福祉国家改革の停滞と、二一世紀初頭のハルツ社会保障改革が影を落としている。総論のハンス・ギンター・ホケルツの論文「問題解決の政策から問題の発生源へ―二〇世紀における社会国家」がこの論集全体の主張を表している。ホケルツも福祉国家の転換点を一九七〇年代に見出すが、転換後の福祉国家は問題の解決能力を失い、財政問題、人口問題、不況、失業問題が深刻化するなかで、福祉国家自身が改革の阻止要因になっているのである。⁽⁴⁸⁾アレキサンダー・ニーツエンアデルは経済危機と

社会政策との関係の歴史を振り返り、九〇年代の動向を見ながら、「危機の時代において、改革はおこなわれておらず、たとえ改革がおこなわれたとしても効果が薄い」と診断する。⁽⁴⁹⁾ ヴィンフリート・ズュースはヨーロッパ諸国と比較しながら、七〇年代の西ドイツ福祉国家が直面した危機は大きくないものの、危機に対して誤った対応が採られたとする。⁽⁵⁰⁾ 「構造に染みついた歴史的経験の総体ゆえに、西ドイツ福祉国家の改革は極めて困難である」と、ズュースは結論づける。つまり、西ドイツ福祉国家は称賛されるべきモデルではなく、むしろ失敗のケースに分類されており、イギリスなどとの比較に基づいて、「ドイツ・モデル」が諸問題に対応できていないことが示されている。⁽⁵¹⁾

二〇一四年夏に出版されたフライブルク大学教授ウルリヒ・ヘルベルトによる『二〇世紀ドイツ史』⁽⁵²⁾ には、近年の研究成果がおおいに反映されている。ヘルベルトによれば、一九世紀末に西欧に現れた古典的工業社会が一九六〇年代に頂点を迎えた（一八頁）。西ドイツが体现した「モデル・ドイツ」とは、経済成長、充実した社会政策、自由主義的法システム、ヨーロッパ統合、開放的文化、東欧との和解から構成され、古典的工業社会がもたらした諸問題に対する解答であった（八八三頁）。⁽⁵³⁾

時期区分としてヘルベルトが強調する一九七三年のオイルショックは、百年間にわたってドイツを特徴づけてきた古典的工業社会の浸食現象の始まりを意味した（九〇二―九〇三頁）。彼によれば、一九七三年以降のポスト古典的工業化社会において、「モデル・ドイツ」の有効性は失われ、現在に至るまで、新たな解決のモデルは発見されていないのだった（九〇三頁）。グローバル化も一九七〇年代に始まっており、現在の起源を、ヘルベルトは一九七〇年代に見い出すのである（九六四頁）。

ヘルベルトの著書において、一九七三年が時期区分として重視される一方、東欧革命とドイツ統一、すなわち一九八九／九〇年はそれと同じ重みを持つ区分と見なされていない。デーリング・マンティフェルの言葉を見てみよう。

いまいちどホブズボームの言葉で言えば、「黄金の時代」から「地すべり」への移行は、一歩一歩着実にすすみ、人々はそれに気がつかなかった。その移行は、一九一八年や一九四五五年の終戦、一九八九年から一九九〇年までの東欧ブ

ロックの崩壊のような刻印を残さなかった。一九八〇年代以降の市場自由主義の爆発的拡大や、国民国家の空間やナショナルな産業体制がテクノロジーによって克服されたことによって特徴づけられる革命的衝撃力にかかわらず、時代の切れ目は理性によって、または感性によって感じられなかった。一九八九／九〇年はいずれにせよ時代の切れ目にならなかった。政治史と国家史上の時代区分となったとはいえ、その区分は産業構造の変化に伴う現象であった。⁽⁵⁴⁾

確かに、デーリング＝マントイフェルも、一九八九／九〇年の東欧革命が画期であったことを認める。そうした明確な画期に対して、七〇年代の「構造断絶」は静かに進む変化だった。一九七〇年代の変化と一九八九／九〇年の画期とを比較した場合、デーリング＝マントイフェルは七〇年代の変化の方をより重視している。「産業構造の転換に伴う現象」として一九八九／九〇年は位置付けられている。⁽⁵⁵⁾

デーリング＝マントイフェル、ラファエル、ヘルベルトらの視点は、一九八九／九〇年、すなわちドイツ統一によって社会が殆ど変らなかった西ドイツ人による時期区分である。統一後、経済の停滞、失業などの諸問題に見舞われた旧東独の人々は異なる見方をするであろう。社会主義からの大転換、そしてグローバル化へという旧東独の人々の経験は、旧西ドイツの研究者の視野からは抜け落ちているかのようなのである。

おわりに

西ドイツ史研究の中心人物アクセル・シルトは、(一)平和で物質的に豊かな社会を実現し、安定した民主主義を確立したという意味での「成功の歴史」、(二)一九四五年が社会的転換とならなかったという意味で「失敗の歴史」、(三)社会保障制度などの「近代化の歴史」、(四)ドイツが西欧・アメリカに接近したという意味での「西欧化の歴史」、そして、(五)ナチズムの過去の克服が不十分におわり、一九四五年前後でエリートの強い連続性があるという意味での「負担の歴史」

をといて五つのポイントから連邦共和国の歴史をとらえる。一九八九年までの歴史に関して五つのポイントは「概ね妥当する」ものの、統一後については、五つのポイントから把握しきれないと、シルトは指摘する。新しい時代に即した「語り」がまだ存在していないことに、シルトはその原因を見出している⁽⁵⁶⁾。

統一後までを視野に入れた新しい「語り」の欠如の原因はどこにあるのだろうか。一九九〇年代以降の政治的・経済的激変のみが理由ではないだろう。「現在と歴史なき国」としてスタートした西ドイツは、四〇年間をかけて、自らの歴史像を形成した。その歴史像は、西欧的民主主義や自由を基準とし、東ドイツはナチ体制に続く独裁政権として描かれただけでなく、西ドイツ人の意識から東ドイツの存在すらも消えた。その連邦共和国に適合的な歴史像は統一後も拘束力を持ち続けた⁽⁵⁷⁾。それは、ヴィンクラーの通史でも克服されていない。なぜなら、統一の必然を説くヴィンクラーの叙述でも、東ドイツは周辺の位置づけられているからであり、新しい通史でも統一後の東ドイツ人の経験は軽視されたままであるからである。

本稿で取り上げた「連邦共和国の歴史家世代」の歴史家にとって、ナチズムと戦争は自らの存在を規定する、いわば「凝集する過去」⁽⁵⁸⁾であった。「連邦共和国の歴史家世代」の後、世代としてまとまりをもち、ドイツ社会に強い影響力を及ぼすようなグループは現れていない⁽⁵⁹⁾。かつての世代にとって切実だったドイツの特殊性あるいは後進性は、若い世代にとって意識のうえでも、実証研究の点でも意味を失っているのであろう⁽⁶⁰⁾。諸問題を抱えたドイツ福祉国家は、若い世代にとってアプリオリに肯定できる存在ではないのかもしれない。

「語り」の欠如は、世代の経験のみに由来するのではなく、現代社会が抱える問題（グローバル化、移民、難民、排外主義、格差、環境破壊、暴力、テクノロジ―）とも関係しているだろう。これらの問題を旧西ドイツの「成功の歴史」の延長上に位置づけることは不可能であり、現在の視点にたつて、旧西ドイツの時期区分を見直すことが必要になる⁽⁶¹⁾。しかも、現代社会が直面する問題をドイツ一国レベルでは解決できない。

ドイツ現代史叙述が現在と過去とをどのようにつなげるか、という問題が浮上してくる。その問いはドイツ人研究者

にのみ向けられているのではない。日本人研究者は、他者としての視点からドイツ史に接近することであり、またそうすべきであらう。

註

- (1) Edgar Wolfrum, *Geschichtspolitik in der Bundesrepublik Deutschland. Der Weg zur bundesrepublikanischen Erinnerung 1948-1990*, Darmstadt 1999, S. 240f, 277, 289, 295f. 領土変遷と西ドイツ人のアイデンティティの変化を論じた文献として以下を参照、佐藤成基『ナチヨナル・アイデンティティと領土―戦後ドイツの東方国境をめぐる論争』（新曜社 二〇〇八年）。
- (2) 歴史家の世代と歴史分析との関係について、星乃治彦「ドイツ労働運動史研究会全盛世代の世代論」『歴史評論』（第六九八号 二〇〇八年六月）を参照。
- (3) Axel Schildt, Deutschland seit 1945, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg. 62 (2011), S. 610-611.
- (4) Heinrich August Winkler, Einleitung, in: Heinrich August Winkler (hrsg.), *Griff der Deutungsmacht. Zur Geschichte der Geschichtspolitik in Deutschland*, Göttingen 2004, S. 11.
- (5) Karl Dietrich Erdmann, *Die Zeit der Weltkriege. Gebhand Handbuch der Deutschen Geschichte. Bd.4. 2. Teilband*, Stuttgart 1976, S. 800. 引用中の「」は白川による補記。傍点も白川による。
- (6) Christoph Nonn, *Theodor Schieder. Ein bürgerlicher Historiker im 20. Jahrhundert*, Düsseldorf 2013, S.199-220.
- (7) 西ドイツにおけるホルムスについて、Eberhard Jäckel, Karl Dietrich Erdmann: Seine Wirkung in der Öffentlichkeit, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg. 61 (2010), S. 731-736.
- (8) Es gibt kein Deutschland mehr!, in: *Die Zeit* (3. Juni 1960).
- (9) Wolfgang J. Mommsen, Historisches Denken der Gegenwart, in: Waldemar Besson (hrsg.), *Geschichte*, Frankfurt (M) 1961, S. 100. 「歴史意識の欠如」について以下も参照。Alfred Heuss, *Verlust der Geschichte*, Göttingen 1959.
- (10) 佐瀬昌盛「戦後ドイツにおける民族・国家理解の変遷と現状」『季刊 社会思想』（第一巻第四号 一九七一年十二月）一〇九頁。
- (11/12) Wolfrum, *Geschichtspolitik in der Bundesrepublik Deutschland*, S. 65-79, 148, 178.
- (13) *Ibid.*, S. 185-192.
- (14/15) *Ibid.*, S. 191-192.
- (16) Richard Löwenthal/ Hans-Peter Schwarz (hrsg.), *Die zweite Republik. 25 Jahre Bundesrepublik Deutschland. eine Bilanz*, Stuttgart 1974. Richard Löwenthal, Prolog: Dauer und Verwandlung, in: *ibid.*, S.10.

- (17) *Ibid.*, S. 11, 16, 17.
- (18) *Ibid.*, S. 9.
- (19) 佐瀬前掲論文 一一三～一二三頁。
- (20) Kitzmüller, Erich/ Heinz Kuby/ Lutz Niethammer, Der Wandel der nationalen Frage in der Bundesrepublik Deutschland. Nationalstaat ohne Nationalökonomie? (Teil 1), in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, (1973), B 33, S.5-8.
- (21) Löwenthal, *op. cit.*, S. 22, 23. ナチズムたるは伝統の復活によつて、アイデンティティの欠如を埋め合わせることは誤りであるといふヘーゲルは述べる。 *Ibid.*, 23.
- (22) ハイネマンの見解はナチス政権のそれと一致している。佐瀬前掲論文一二三頁。
- (23) Gustav W. Heinemann, 100. Jahrestag der Reichsgründung, in: Gustav W. Heinemann, *Präsidentiale Reden*, Frankfurt (M) 1975, S. 142-148.
- (24) Gustav W. Heinemann, Die Freiheitsbewegungen in der deutschen Geschichte, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.25 (1974), S. 603. 引用中の「 】は白川による補記。
- (25) *Ibid.*, S. 602, 603, 605. 傍点も白川による。
- (26) Wolfrum, *Geschichtspolitik in der Bundesrepublik Deutschland*, S. 308, 309.
- (27) Paul Nolte, Die Historiker der Bundesrepublik. Rückblick auf “lange Generation”, in: *Merkur. Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken* Nr. 601, Jg.53 (1999), S. 417f, 424f.
- (28) *Ibid.*, S. 428.
- (29) *Ibid.*, S.416f.
- (30) *Ibid.*, S. 426f; Edgar Wolfrum, Epilog oder Epoche? (Rück-)Blick der deutschen Geschichtswissenschaft vom Zeitalter der Zweistaatlichkeit bis zur Gegenwart, in: Herfried Münkler/ Jens Hacke (Hg.), *Wege in die neue Bundesrepublik. Politische Mythen und kollektive Selbstbilder nach 1989*, Frankfurt (M)/ New York 2011, S. 29-63, 特記 S. 55.
- (31) Nolte, *op. cit.*, S. 421f.
- (32) Heinrich August Winkler, *Der lange Weg nach Westen. 2 Bände*, München 2000 (邦訳(後藤俊明、奥田隆生、中谷毅、野田昌吾訳)『自由と統一の長い道: 第Ⅰ巻: ドイツ近現代史一七八九―一九三三年、第Ⅱ巻: 一九三三―一九九〇年』(昭和堂 二〇〇八年)。この書からの典拠は、(Ⅰ、一八九頁)(Ⅱ邦訳書第Ⅱ巻、一八九頁)というように本文中に記入している。ヴァイクラウについて、以下を参照、今野元「ハイネリヒ・アウグスト・ヴァイクラウと『ナチズムの機能』論」『紀要(愛知県立大学)』(第三九号 二〇〇七年) 七三～九七頁。
- (33) ヘンス＝ウルリヒ・ヴァイクラウも東ドイツに対して厳しく、以下のように述べる。「ソ連の州であり、最終的にはソ連の武力によつ

- て与えられていた」東ドイツには「自らを安定させる能力はなかった」のに対し、西ドイツのみが「存在し続け、将来も生き抜く能力を備えた国家であり、その国家においてのみ、政治的、経済的、法的、文化的、近代化が可能になった」。そのため、ヴェーラーは、戦後史を描く時、東ドイツを西ドイツと同等に扱わなかった。Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Bd.5: Bundesrepublik und DDR 1949-1990*, München 2008, S. XV. これは、旧西ドイツ歴史学界の反共産主義の伝統に表出と言えるだろう。Wolfgang Benz/ Michael F. Scholz, *Deutschland unter alliierter Besatzung 1945 - 1949. Die DDR*, Stuttgart 2009, S.252.
- (34) Benz/ Scholz, *op. cit.*, S. 262f. 最近の研究動向の紹介として以下を参照、福永美和子「統一ドイツにおける東ドイツ史研究と東ドイツをめぐる歴史意識」『過去の未来と未来の過去』保坂一夫先生古希記念論文集（同学社 二〇一二年二五九―二六九頁、特に 二六二―二六三頁。社会史研究に基づいた東ドイツ社会像として以下も参照、石井聡『もう一つの経済システム 東ドイツ計画経済下の企業と労働者』（北海道大学出版会 二〇一〇年）。
- (35) Heinlich August Winkler, Die deutsche Frage ist gelöst, die europäische Frage ist offen. 60 Jahre Bundesrepublik: Rückblick und Ausblick, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, Jg.60 (2009), S. 490, 492.
- (36) Eckart Conze, *Die Suche nach Sicherheit. Eine Geschichte der Bundesrepublik Deutschland von 1949 bis in die Gegenwart*, München 2009. 典拠部分の頁数は本文中に示す。
- (37) 二〇一四年にペーパーバック版が出版されたが、統一後の動向についての加筆はない。
- (38) Lutz Leisering, Der deutsche Nachkriegssozialstaat. Entfaltung und Krise eines zentristischen Sozialmodells, in: Schwarz, Hans-Peter (hrsg.), *Die Bundesrepublik Deutschland. Eine Bilanz nach 60 Jahren*, Köln/ Weimar/ Wien 2008, S. 443.
- (39) エリック・ホブズボーム（河合秀和訳）『権威の歴史―二〇世紀の歴史（下巻）』（三友堂 一九九四年）第四章。
- (40) Anselm Doering-Manteuffel (hrsg.), *Strukturmerkmale der deutschen Geschichte des 20. Jahrhundert*, München 2006, S.5.
- (41) Konrad H. Jarausch, Verkannter Strukturwandel. Die siebziger Jahre als Vorgeschichte der Probleme der Gegenwart, in: Jarausch (hrsg.), *Das Ende der Zuversicht? Die siebziger Jahre als Geschichte*, Göttingen 2008, S. 9-26.
- (42) Winfried Stüß, Der keynesianische Traum und sein langes Ende. Sozialökonomischer Wandel und Sozialpolitik in den siebziger Jahren, in: Jarausch (hrsg.), *Das Ende der Zuversicht?*, S. 126,127.
- (43) Gabriele Metzler, Staatsversagen und Unregierbarkeit in den siebziger Jahren?, in: Jarausch (hrsg.), *Das Ende der Zuversicht?*, S. 244, 245, 259, 251.
- (44) Anselm Doering-Manteuffel/ Lutz Raphael, *Nach dem Boom. Perspektiven auf die Zeitgeschichte seit 1970*, Göttingen 2008, S. 9-11; Stüß, Der keynesianische Traum, S. 134.
- (45) Stüß, Der keynesianische Traum, S. 133-134.

- (46) Andreas Rödter/ Thomas Hertfelder (Hrsg.), *Modell Deutschland. Erfolgsgeschichte oder Illusion?*, Göttingen 2007.
- (47) Der Sozialstaat in der Krise. Deutschland im internationalen Vergleich, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd.47 (2007), S. 3-401.
- (48) Hans Günter Hockerts, Vom Problemlöser zum Problemerzeuger? Die Sozialstaat im 20. Jahrhundert, in: *ibid.*, S. 16.
- (49) Alexander Nützenadel, Wirtschaftskrisen und die Transformation des Sozialstaats im 20. Jahrhundert, in: *ibid.*, S. 45.
- (50) Winfried Süß, Der bedrängte Wohlfahrtsstaat. Deutsche und europäische Perspektiven auf die Sozialpolitik der 1970er-Jahre, in: *ibid.*, S. 126.
- (51) 以下を参照。Hans Günter Hockerts/ Winfried Süß (hrsg.), *Soziale Ungleichheit im Sozialstaat. Die Bundesrepublik Deutschland und Großbritannien im Vergleich*, München 2010.
- (52) Ulrich Herbert, *Geschichte Deutschlands im 20. Jahrhundert*, München 2014. 典拠部は本文中に記すところ。
- (53) 以下を参照。Andreas Rödter, Das “Modell Deutschland” zwischen Erfolgsgeschichte und Verfallsdiagnose, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 54 (2006), S. 347f.
- (54) Anselm Doering-Manteuffel, Nach dem Boom. Brüche und Kontinuitäten der Industriemoderne seit 1970, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 56 (2007), S.561.
- (55) デーリング・マンテュエルによれば、八〇年代前半以降、社会主義諸国において経済改革の圧力が高まっており、一九八九年よりも前に始まっていた変化の帰結が八九年の革命であった。Anselm Doering-Manteuffel, Langfristige Ursprünge und dauerhafte Auswirkungen. Zur historischen Einordnung der siebziger Jahre, in: Konrad H. Jarausch (hrsg.), *op. cit.*, S. 314
- (56) Axel Schildt, Überlegungen zur Historisierung der Bundesrepublik, in: Axel Schildt, *Annäherungen an die Westdeutschen. Sozial- und kulturgeschichtliche Perspektiven auf die Bundesrepublik*, Göttingen, 2011, S. 17-28.
- (57) Wolftrum, *Geschichtspolitik in der Bundesrepublik Deutschland*, S. 355, 356.
- (58) 小谷庄之「歴史学の自己陳外」西川正雄・小谷庄之編『現代歴史学入門』（東京大学出版会 一九八七年）一六・一九頁。
- (59) Nolte, *op. cit.* S. 429.
- (60) Nolte, *op. cit.*, S. 430. 例えば、ドイツ帝国史研究の最新の成果をまとめた論文集『ドイツ帝国再訪』において、編者スヴェン・オリバー・ミューラーとコーネリアス・トルプは、ドイツ帝国が保守的なのか、近代的なのか、保守エリートが強固な支配を築いた社会なのか、それとも民主制の一步手前にあつたのか、「ドイツ帝国の歴史像は過去三〇年間にますます曖昧になっている」と述べる。Sven Oliver Müller/ Cornelius Trop (eds.), *Imperial Germany Revisited. Continuing Debates and New Perspectives*, London 2011, pp. 10, 11.
- (61) Axel Schildt, Zeitgeschichte der “Berliner Republik”, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, (2012) B1-3, S. 7.